

「わからない」からはじまる 山間地の保険的なむらづくり ～死守でも諦めでもない第三のむらづくり

林 直樹

はじめに

本稿では、「先のことはわからない」を起点として、山間地の長期的な生き残りに向けた「保険的なむらづくり」について述べる。具体的には、①田畑や人工林の粗放的な管理、②地区外の構成員と連携した共同体（集落そのもの）の維持、③民俗知の拠点的な維持である。また、新しい集落を形成するための手段として集落移転（自主再建型移転）に注目し、その評価や今後の課題を整理する。

I 保険的なむらづくり

1 わからないなら「保険」

過疎の最終段階である無居住化が危惧されるような山間地の「長期的な生き残り」について考えてみたい。

図1は福岡県の2050年の無居住化区域を示したものである。ただし、人口動態に関する少し前の傾向が続いた場合であり、地域おこし協力隊などの活躍により、よい意味で予想が外れる場合もあれば、国からの支援の減少により、わるい意味で予想が外れることも考えられる。福岡県に限らず、山間地の農村の多くは激変のさなかにあり、個々の状況について遠い将来を予想することは至難である。

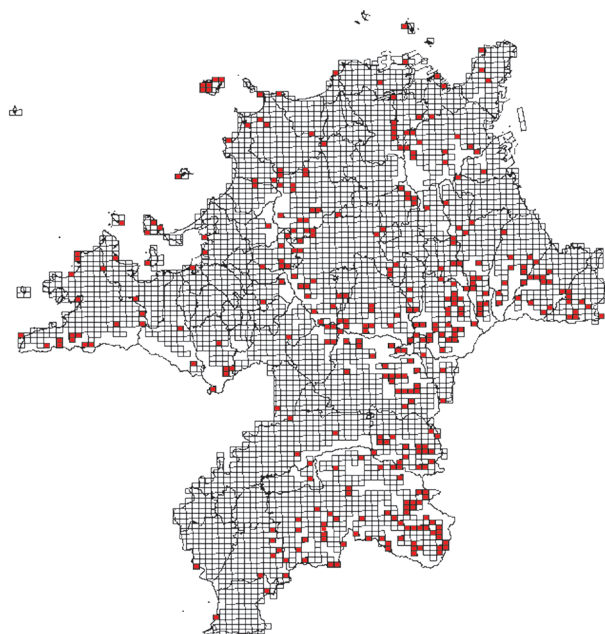
そのような状況に対し、十把一からげに「大丈夫、現状を死守すべき」「無理、諦めるべき」と叫ぶことは容易であるが、それらが状況を改善することはないで

あろう。

筆者は「将来の個々の状況はわからない」を起点として長期的な生き残りを考えることを推奨している。難しく考える必要はない。ヒントはわたしたちの人生戦略のなかにある。わたしたちは長い人生のなかで多くの「わからない」に直面するが、対策として「保険」（金銭を伴わない場合も含む）をかけることが多い。例えば、「運転中に交通事故を起こすかわからない」であれば「自動車保険をかける」である。「わからない」となれば保険が効果的である。

見通しがつきやすい安定的な世の中が続いたため、「意外」と感じるかもしれないが、本章では、激変のさ

図1 福岡県の2050年の無居住化区域（赤く塗られた区域）



注) 沖ノ島・小屋島は除いた
資料) 国土交通省「国土数値情報 1kmメッシュ別将来推計人口（H29国政局推計）（shape形式版データ）、平成29年度、世界測地、福岡」